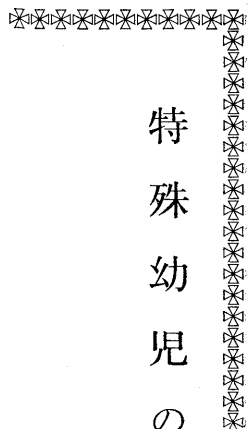


特殊幼児の保育



河井祥子



私と障害児との出会いは、現在小学校三年に在学する二児でした。

一人はえりちゃんという自閉的な傾向をもつ子ども、もう一人は、脳性小児マヒによる肢体不自由のコウちゃんでした。入園当初のえりちゃんは、人の髪の毛を突然引っぱったり、大きな声で泣きだしたり、子どもたちはもとより、私も教師が、あっけにとられるような目が続きました。

その中で彼女なりに特性をもっていることを発見したのが、六月になったころでしょうか。絵をかくことが好きで、一人黒板に向かって「あひる」の絵を「これはババのあひる」「これはママ」というようにたくさんかいて楽しんでいました。

このように何か一つの安定した状態を見いだすと、お互いに安心感が出てくるようです。そのうち、クラスの子どもの中から、えりちゃんに、「怪獣エリゴン」というあだ名がつけました。なししろ幼稚園の中を台風のごとく荒しまわっていたのですから。

男の子の友だちができました。親切な女の子も友だちになりました。落ち着いて、絵本を読んでというようにもなりました。

三学期の終わりには、クラスの子どもたちと共に劇の中で歌うたいました。一年は早いのですが、えりちゃんにとっては、長い最も変化の多い一年だったことでしょう。

こんなことから、障害児との縁が続くようになり、年々、自閉的傾向をもつ子ども、ちえ遅れの子ども、そして言語障害の子ども、というように、私たち、子どもたちの仲間が増えてきました。次に特殊児の園生活を少し書いてみましょう。

自閉的傾向のある子どもの場合

はじめての出会いが、自閉的傾向をもつ子どもであり、それ以来、毎年そのような子どもたち数人を加えて生活するようになりました。そのうち小学校へ進学したものが三名になりました。

私たち送り出す者は進学先の学校について頭を悩ませます。それは園生活一年ないし二年の間に、自閉的傾向が大変少なくなっ

たとはいっても普通児と変わらないようになることはまれですが、なかなか受け入れていただけません。受け入れて下さった場合でも、その後のことが心配になってきますが、このことはまた、あとで書いてみたいと思います。

この子どもたちは、共通して子どもたちとの接触を好まず、自己活動がとても高いことです。

「オルガンが得意な子ども、何回か弾いてあげると、なに調でも弾きこなしてしまいます」

「マーク・字に興味のある子ども」

「正確な絵を好んで書く子ども」

などとさまざまですが、これらのことを媒体に普通児との関係をつけていく場合も多くあります。

けん君は、ほとんどの子どもが登園し終わったころ母親とやってくる、三歳になったばかりの自閉的傾向をもつ子どもです。この種の子どもに共通の対人関係が欠けている状態です。コートを開き、カバンを置くと、一人で外へ出ていき、ドロコ遊びで彼の一日は始まります。やがて、砂を固めてボールを作っている年長児の中に割り込み、彼らが水を使ったり白砂をかけたたり一生懸命に作った宝物のボールを次から次へ取ろうとする、こわしてしまふ。そこで、このコワイ先生の目が光るわけです。ところが……子どもたちは先生より人間ができています。気前よくあげてしまふのですから……。

ここで一つ問題があるわけです。障害児の多くは、家庭で非常にわがままに育っています。幼稚園においても、自然と子どもたちの間で過保護にされる傾向があるようです。そのような時、私たち教師は、子どもたちの間でより良い方向へカジをとっていくわけです。普通児の間で受け入れがうまくいけば、子どもたちとのつながりは、いやがおうでも強くなってきます。

けん君も毎日お弁当を持ってくるのですが、手をつけたことがない。ところがある日、女児からバナナをもらい喜んで食べる。次の日、暖かい日の光を浴びて、外にゴザを敷きお弁当を食べる。けん君のお弁当はバナナにふりかけごはん。「先生、けん君がごはんたべてる」という子どもたちのうれしそうな声。けん君がはじめてお弁当を食べた日のことです。

そのあと、一人の男児がはずかしそうに私のそばにやってきて小声でささやく。「先生きょうもいいでしょう」「何が?」「けん君と手をつないで帰って」

途中入園のけん君、入園当時は、お友だちをつねったり、牛乳ビンを割ったりで、どうしたら子どもたちの中へ入っていけるかと心配したのが夢のよう、約二ヵ月後の現在、教師との関係より早く、素直な形で子どもたちとのつながりができてきたようです。

この子どもの場合は年齢が低い（二歳児で入園）ためか、なじみ方が早かったようですが、一人一人、期間も、方法も異なっ

いるようです。しかし、すべてこれら特殊児にいえることです。が、まず教師の受け入れる心、ほかの子どもたちが受け入れる心がなにより大切のようです。

知恵遅れの子どもの場合

三学期に途中入園してきたみかちゃん（四歳児）は、三歳児の中でみることにしました。障害児治療センターの管理のもとで、少しずつ集団に慣れさせていこうというのが、母親と私たち教師との望みでした。最初のころは、一日中ほとんど動くことなくすわったまま、もちろんトイレへ連れていくこともできない状態でした。

一ヵ月もすると、三歳児の中の一人が、彼女のめんどろをみるようになりました。何のこだわりもなく話しかける姿を見ていると、何か治療の、また保育の可能性が見いだされるようでした。子どもたちのそのような働きかけから、だんだんと固さがとれ、遊びの中にも一応入っていけるようになりました。言語の面でも「ママ」「イヤ」等のわずかな単語しか発していなかった彼女も、四月に入ると、言葉の数も多くなり、そのできごとに関する適切な表現もするようになりました。そして幼稚園での生活を、彼女なりに楽しみ、十分にからだを動かしていけるようになりました。

普通児と同じレベルの遊びはむずかしいようですが、ほかの子どもとの遊びを見ていたり、また、わずかな時間でも、仲間に入る

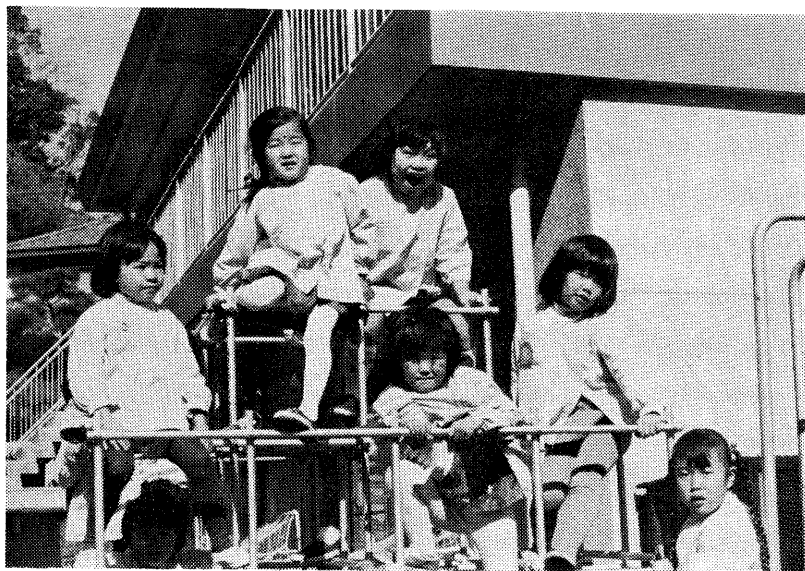
ことにより、学習し、生活範囲を広くしていつている様子です。彼女にあだ名がつきました。あだ名も親しみのうちで、無視できない交流手段の一つです。彼女は「でぶミカちゃん」私は「デブ先生」、お付き合いであだ名をいただくのも楽しいものです。

こんなことで一年が過ぎたわけですが、彼女の変化は、知的な面ではあまり著しい変化はありませんが、社会性、運動面、情緒面での発達が大きい様です。この子どもたちにとって、隔離され、接触のほとんどない生活による遅れがみられます。その意味でも、暖かい心で受け入れてあげたいのです。この子どもたちの伸びる芽をつみ取らないためにも……。

身体的障害をもつ子どもの場合

私たちが扱った子どもは、先天性脳性マヒによる肢体不自由児で、ひとりっ子のため、親とのつながりが深く、自立が遅れていたようです。受け入れ側も、はじめ、十一月には自閉的傾向をもつ子どもが入園し、一人で行動しているのを見て刺激されたためか、親とも離れ、幼稚園生活を過ごすようになりました。手足が不自由なため、お弁当はなかなか上手にいきませんし、歩行もうまくはいきませんが、階段の上り降り、かけっこ、体操、お友だちと相撲をとったりなど、段々自信をつけていきました。

◆普通児の保育の立場から考えてみましょう。私の幼稚園でもいえることです。特に私立の幼稚園では、ある幅の中——知的面



みんなといっしょ、みかちゃん（上段 右）

・環境面—の子どもの集団である場合が多いのではないでしょう
か。その面においても、身体的に弱い子どももいれば、精神的に
弱い子どももいるということは、人間を幅広く受け入れる心を知
っていくように思われます。

同じクラスの仲間意識は強く、障害児のできないことがあれば
進んで手助けをするし、共に成長していこうという意識も芽ばえ
てきます。また、小さなできごとにも喜びを感じます。

ある日の午後、「おかえりのうた」を皆で歌っていますと、突然
女兒が「先生大変、みかちゃんがいっしょに歌をうたっているの
よ！」 私には「よかったわね」としかいえない胸いっぱい喜び
がありました。歌をうたってくれたのもうれしいけれど、それ
以上に、それを喜んでくれた、やさしい心をもつ子どもたち——。

また、三月に近いある日、女兒が「先生、すみちゃんとみかち
ゃんが学校へいくんだって」「そうよ、みんながみかちゃんたち
と仲良くしてくれたから学校へいけるようになったのよ、よかつ
たわね」男児「先生、でもみかちゃんたち、学校へいっておこら
れないかな」「どうして」「静かにしていられるかどうか心配だ
よ」

私たちが考える以上に、子どもたちは仲間を思っていることに
喜びを感じます。

◆父兄の立場

月に一度、親と教師との話し合いの場である父兄会を開きま

す。その都度いろいろな話を取り上げられ話し合っています。が、特殊児をもつクラスにとって、中心はよくこれらの子どもが話題になります。今までですと、子どもについての話題がどうしても子どもというものを素直に見ず、きぬを一枚かぶせた状態での話題だった様に思いますが、現在は、もっと基本的時点に戻って子どものほんとうの幸せは何か、目をそらすことなく話し合えるように思います。そして親自身も、現在の幸せをかみしめ、背伸びをすることなく、また、これら障害児をもつ親ごさんたちとも手をつないでいこうとしています。

自分の幸せばかりでなく、広い意味の幸せが考えられるようになったことだけでも、このような保育の収獲のように思われます。

◆保育者の立場

障害児を普通児の中で保育することはむずかしい。しかしそれは、私自身がほんとうの保育についての勉強が足りなかったからだと思います。保育を正しく見つめていたならば、そして子どもの心を受け入れる心をもっていたならば決してむずかしいものではない、ということ子どもたちが教えてくれました。障害児の心は純粹です。おとなに喜ばれようとか、おとなのきげんをとるようなことはしませんから。

この未熟な私が、何年か障害児と共に過ごすことにより、ほんとうの子どもの姿、幼児は何を求めているのか、これらの子ども

もを通して解ってきたように思います。保育というものが、そんなに表面的で簡単なものではなく、もっと深い所にあるのではないかということを、彼らに教わります。その中で、普通児と障害児との関係をつけていく。そこからの発見ということが出てきます。

けん君がおへやに水をまいて歩いている。けん君は水が好きでほとんど一日中水と付き合っている。その時、子どもたちがぞうきんでふいて歩く、そのうち何人かが同じようにぞうきんを持ってくる。そのあと、また、何人かの子どもがついてあるく。道ができた。自動車も通る。けん君と子どもたちの間に、教師が入るすき間がないくらいのつながりができています。

また、ある時は、乱暴をしたり、大声を出したりすることもあります。皆が静かにしているのに、さわいでいる。しかしその状態を見て、子どもたちは、自分自身がとる態度を学習しています。

普通児の立場でも書きましたが、普通児を対象にしているだけではむずかしい保育が、これらの子どもを通して保育できるということはうれしいことです。

この幼稚園の近くに山があります。低い山ですが、急斜面のため、大層登りにくいところです。そこを登るのにどうしても障害児は遅れがちですが、先に登り切った子どもたちが救援隊で来てくれます。自分一人が登るのにもやっとなのに、一歩登れば二歩

すべる。それでもいっしょうけんめい助けてくれます。自分たちのみが頂上にのぼればいい。いいかえれば、自分たちだけが幸せならいいのではないということが少しでもわかってくれるのではないかと思います。

◆最後に

以上、それぞれの立場からみた、保育の効果について取り上げてみましたが、これは一方的な見方かもしれません。

すべての立場から、ブラスの方向にのみ解釈しているように思われるかもしれませんが、普通児のみの保育にしてもこれと同じことがいえるのではないのでしょうか。どんな子どもでも、どんな環境でも、それを最初から拒否してしまえば前進はありませんし、教育とはいえないのではないのでしょうか。今、現在、目の前にした子どもを、いかに教育していかうか、それがどんな子どもであろうと、そこに教育としての楽しみがあるのではないのでしょうか。

今でも、私たちが新しく障害児を受けもつ時は、どのように、この子どもをクラスの中に適応させていくか、悩みますし、不安も抱きますが、実際に子どもと何日か付合うことで普通児との接点が見いだされてきます。これは、非常にむずかしいことのようにですが、幼児教育にたずさわる先生方なら、意外にやさしく、楽しさを感じられるでしょう。そのこまかい心くばり、誠意が子どもたちに真の幸せを、与えてあげることになるでしょう。幼稚園

だけではありません。学校教育においても、もっと深い理解がほしいと思っています。すみ子ちゃん、四月から近くの小学校へ通っていました。しかし何日かすると学校へ行きながらなくなってしまったそうです。母親がわけを聞くと「センセイ、ピンするからいやだ」というのだそうです。その後、五月から一年近く幼稚園へ通ってきたのですが、日増しに落つきを取り戻し、明るい子どもになってきました。

このように、学校からも拒否される子どもが大勢いますが、集団に入れないからとか、落ちつきがないから、乱暴だからと、教育をきれいごとですまそうとするならば、障害児はもとより、普通児の教育の上にも決して良い結果はあらわれなと思います。

(鎌倉聖路加幼稚園)

